

平成 27 年度 全国私立中学高等学校
私立学校特別研修会
外国語（英語）教育改革特別部会
〔東京エリア〕
実施報告

主催 一般財団法人私学研修福祉会
 協力 一般財団法人日本私学教育研究所・上智大学言語教育研究センター
 後援 日本私立中学高等学校連合会

小学校・中学校・高等学校等を通じた英語教育改革を進める文部科学省では、平成 26 年度より英語教員の英語力・指導力強化を図る観点から、英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を外部専門機関に委託し実施しています。同研修は、全国の国・公・私立学校の英語教員を対象にしていますが、公立学校を中心とした研修の仕組みになっていることから、私立学校教員は参加しにくい状況になっています。

また、国が進める英語教育改革に係る最新の情報も、私立学校には十分に伝わっていないのが実情で、私立学校教員は公立学校教員に比べその情報量が少ない故に埒外に置かれた状況となっています。

については、私立学校においても、外国語（英語）教員の外国語（英語）力・指導力強化を図るためには、教員が 21 世紀型教育に相応しい最新の教授法等を取り入れる必要があることから、平成 27 年度より専門家の指導による研修を実施することとしました。

- ◆ **会 期** ◆ 平成 27 年 6 月 13 日（土）
- ◆ **会 場** ◆ 上智大学四谷キャンパス 2 号館 17 階 1702 会議室
 東京都千代田区紀尾井町 7-1（JR・東京メトロ四ツ谷駅徒歩 5 分）
- ◆ **参加者数** ◆ 144 名（募集 120 名・1 校 2 名迄）
- ◆ **参加対象** ◆ 私立中学高等学校の英語科教諭（体験授業は英語で行われます）
- ◆ **プログラム** ◆
 - ①講演 演題 21 世紀型の英語教育を目指して
 講師 吉田研作 上智大学特任教授・言語教育研究センター長
 - ②体験授業
 CLIL（クリル：内容言語統合型学習）～21 世紀型の英語授業を体験する～
 上智大学が実践する英語授業を、吉田研作氏の指導助言も交えながら行います。
 - ・講師 池田 真 上智大学文学部英文学科教授
 - ・講師 逸見シャンタール 上智大学言語教育研究センター准教授
 - ③実践発表
 - ・実践発表 I
 テーマ「ICT を活用した新たな英語教育とその実践事例」
 発表者 藤戸政綱 聖徳学園中学高等学校教諭
 - ・実践発表 II
 テーマ「ICT を活用した英語の授業デザイン」
 発表者 反田 任 同志社中学高等学校教諭
- ◆ **日程概要** ◆

時刻	09 30	10 00 15	11	12 45	13 45	14	15 00	16	17 45 00
6 月 13 日 （土）	受付	開 会 式	①講演	昼食	②体験授業		③ 実践発表		開 会 式

◆ 講師プロフィール ◆

吉田 研作 氏

1948年生まれ。上智大学特任教授、言語教育研究センター長。上智大学大学院、アメリカ・ミシガン大学大学院修了。専門は、応用言語学。J-SHINE 会長。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」座長、「外国語能力の向上に関する検討会」座長、「外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標・設定に関する検討会議」座長、「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」委員・「同協議会作業部会」主査などを歴任。今年からは「高大接続システム改革会議」委員、中央教育審議会「教育課程企画特別部会」委員などを務めている。近年では、日中韓 3カ国の高校生の英語力比較や、教師の教授法比較などについての研究にも力を入れている。「起きてから寝るまで英語表現 700」シリーズや「小学校英語指導プラン完全ガイド」（ともにアルク）などの監修を務めるほか、著書多数。

池田 真 氏

上智大学文学部教授。早稲田大学政経学部卒、上智大学大学院文学研究科、ロンドン大学大学院応用言語学・英語教育専攻科修了。博士（英語学）。専門は英文法史と内容言語統合型学習。日本における CLIL 実践・研究の先駆者で、国際的にも *International CLIL Research Journal* 客員編集委員などを歴任。近刊に『歴史社会言語学入門』（大修館書店、共著）、『教科の本質からコンピテンシーへ：資質・能力を中心に据えたカリキュラム編成と授業づくり』（図書文化社、共著、7月刊）。上智大学の他、早稲田大学、京都大学、国際基督教大学でも教鞭を執る。9月よりロンドン大学キングズカレッジ客員研究員。

逸見 シャンタル 氏

上智大学言語教育研究センター准教授。エクセター大学より 2003 年に教育学博士 (EdD TEFL) を取得。ブリティッシュ・カウンシルにて、主に英国人講師のための実践的な研修、ならびに小学校外国語活動導入のための研修に携わる。2013 年より上智大学の EAP/CLIL のコースのカリキュラムデザイン、及び PD (Professional Development) の企画、運営を担当。2015 年より現職。研究分野はバイリンガルのアイデンティティと CLIL の原理と実践。

◆ 講師・発表者・指導員 (順不同) ◆

吉田 研作	上智大学特任教授・言語教育研究センター長
池田 真	上智大学文学部英文学科教授
逸見 シャンタル	上智大学言語教育研究センター准教授
藤戸 政綱	聖徳学園中学高等学校教諭
反田 任	同志社中学高等学校教諭
中川 武夫	蒲田女子高等学校顧問

◆ 特別委員・指導員 (順不同) ◆

平方 邦行	工学院大学附属中学高等学校校長
浜野 能男	普連土学園中学高等学校校長
堀内 成子	札幌聖心女子学院中学高等学校教諭
後藤 健一	聖ウルスラ学院英智中学高等学校教諭
藤戸 政綱	聖徳学園中学高等学校教諭
反田 任	同志社中学高等学校教諭
野中 理恵	広島女学院中学高等学校教諭
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所事務局長代行
山崎 吉朗	一般財団法人日本私学教育研究所主任研究員

◆ 日 程 表 ◆

6月13日(土)

〔会場 上智大学四谷キャンパス2号館17階1702会議室〕

09:30	
10:00	受 付
	◇ 開会式 司会 川本 芳久 (一財)日本私学教育研究所 事務局長代行
	1. 開会の辞 2. 開会挨拶 (一財)日本私学教育研究所 所長 中川武夫 上智大学 特任教授・言語教育研究センター長 吉田研作
	3. 関係者・特別委員紹介 4. 研修会方針説明 (一財)日本私学教育研究所 外国語(英語)教育改革特別委員長 平方邦行 5. 日程説明 (一財)日本私学教育研究所 主任研究員 山崎吉朗 6. 閉会の辞
10:15	◇ 講演 司会及び講師紹介 外国語(英語)教育改革特別委員 浜野 能男
	演題 「21世紀型の英語教育を目指して」 講師 上智大学 特任教授・言語教育研究センター長 吉田研作
11:45	
12:45	昼 食
	◇ 体験授業 (英語で行われます) 司会及び講師紹介 外国語(英語)教育改革特別委員 堀内 成子
	CLIL(クリル:内容言語統合学習)～21世紀型の英語授業を体験する～ 講師 上智大学 文学部英文学科教授 池田 真 講師 上智大学 言語教育研究センター准教授 逸見シャントール 指導助言 上智大学 特任教授・言語教育研究センター長 吉田研作
15:00	◇ 実践発表 司会及び発表者紹介 外国語(英語)教育改革特別委員 後藤 健一
	☆実践発表Ⅰ テーマ「ICTを活用した新たな英語教育とその実践事例」 発表者 聖徳学園中学高等学校 教諭 藤戸政綱
	☆実践発表Ⅱ テーマ「ICTを活用した英語の授業デザイン」 発表者 同志社中学高等学校 教諭 反田 任
16:45	◇ 閉会式 司会 川本 芳久
	1. 閉会の辞 2. 総括 (一財)日本私学教育研究所 主任研究員 山崎吉朗 3. 閉会の辞
17:00	解 散

私立学校特別研修会
外国語(英語)教育改革特別部会【東京エリア】実施報告

平成 27 年度の新規・重要事業の一つとして新たに設置された外国語(英語)教育改革特別部会(以下、「特別部会」)は、国が進める英語教育改革、大学入試制度改革の動きに対応していくため、英語教員の英語(外国語)力・指導力の強化、及び 21 世紀型の英語教育にふさわしい最新の教授法を積極的に取り入れることを目的とした、専門家の指導による実践的な教授法に係る研修会である。また、文部科学省による「英語教育推進リーダー中央研修」の研修実習の受け皿としての役割を併せ持つ。

本年度は全国 5 つのエリアで開催する。会期は 2 日を基本とし、英語教育において先進的な取り組みを行う学校の英語授業視察並びに専門家による講演・ワークショップ等を研修会の柱として実施する。

当特別部会【東京エリア】は、6 月 13 日(土)、上智大学四谷キャンパスを会場に、募集人員 120 名に対して全国から参加人数 144 名の英語科教員等で実施した。1 回目となる当研修会は、上智大学言語教育研究センターの協力のもと、上智大学四谷キャンパスを会場に終日研修を行った。参加申込者が定員を超えたため、急きょ会場後方に椅子のみの席を追加しての開催となった。

《開会式》

当研究所の中川武夫所長(蒲田女子高等学校顧問)、並びに上智大学の吉田研作特任教授・言語教育研究センター長による開会挨拶に続いて、平方邦行・外国語(英語)教育改革特別委員長(工学院大学附属中学高等学校校長)による研修会方針説明にて本研修会の趣旨と経緯が述べられ、国による教育改革の性急な流れに私立学校としても対応していく必要があることから、当研修会は現場の英語教員のための実践的な研修会であることを確認した。関係者・講師・特別委員等の紹介のあと、山崎吉朗当研究所主任研究員より日程説明が行われた。



中川武夫所長



吉田研作特任教授



平方邦行特別委員長

《講演》

文部科学省有識者会議・中央教育審議会に数々の座長・委員を務め、英語教育改革の先導的な役割を担われている吉田研作氏が「21 世紀型の英語教育を目指して」と題して、最新の改革状況、日本の英語教育の課題と今後の方向性等について解説した。

英語教育改革の必要性が高まる中で、グローバル化に対応した英語教育改革実施計画が策定された。小学校高学年から教科型英語授業が導入されることで、必然的に内容が前倒しされ、学力的に取り残される生徒の数の増加が懸念される。国が目指す高校卒業時の英語力の目標に現状では達しておらず、全体の底上げが必要である。英語力向上のために大学入試改革は不可欠であり、2020 年度より移行する新型入試で英語は 4 技能を全て入れることになる。世界的に見て日本人の学習到達度は高いのに英語力のみが低いのは、外国語に対する自信のなさという内向きな日本人の特性が大きな要因となっている。そこで、個人の中に個人の必要性に合った言語が存在する Plurilingual を目標に、「国際共通語としての英語」を使えるようにする。ネイティブのような発音ではなく、アイデンティティを持った日本人として、日本人の英語で言いたいことをきちんと相手に伝わるようにすること、コミュニケーションが大切である。4 技能を伸ばすためには Can-do を活用して目標を目に見える形にすることで到達できるようにすることが有効で、生徒にとって受け身の授業(Low Order Thinking Skills)よりも主体性をもった授業(High Order Thinking Skills)が効果的である。他教科と統合した内容を織り込む手法(CLIL)もある。更に言えば、英語以外の外国語指導の充実が必要である。教員は英語以外に副専攻を持つべきで、例えば社会などの教科を英語で教える能力が求められてくる。



《体験授業》

午後は、「CLIL(クリル：内容言語統合型学習)～21世紀型の英語授業を体験する～」と題して、日本の CLIL 実践の第一人者である池田真氏(上智大学文学部英文科教授)ならびに逸見シャントール氏(同言語教育研究センター準教授)が、体験授業を行った。

まず、池田氏より CLIL の全体像について日本語で説明があり、CLIL は content(内容)を単なる知識の蓄積としてだけでなく、どう使えばよいかを考えそれを発信できることを目指しており、統合的な授業ですべての活動を英語で行うことによって 4 技能向上に加え、論理的思考力や共同意識といったグローバル人材育成に必須の要素を培う特長がある。CLIL 自体は英語教育に置き換わるものではなく、それを補強するものであることに留意されたい。私立学校は教科書をベースにある程度自由に内容を組み立てて新しい教授法を試みることも可能ではないかと述べた。その後、参加者は高校理科のカリキュラムを基にした CLIL 授業を生徒の立場で体験した。参加者からは、CLIL 学習の評価の方法・観点、生徒への定着度の判定・促進等について質問が出された。



逸見氏による CLIL 授業では、教科書教材を基にペアやグループでディスカッションが展開され、数人が文章の異なる部分を持ち、数人で全体をつかむ Jigsaw Reading 等 4 技能統合学習を体験した。

何れの授業も小グループに分かれての活動で、活発な英語によるコミュニケーションが行われ、参加者は講師から投げかけられた質問に対して考え、自分の意見を英語で述べる授業形態を体験した。



指導助言者の吉田研作氏は、「池田先生は本格的な Strong CLIL 授業を、逸見先生はテキストを補充する形で Light CLIL 授業を実践した。様々な活動を通して生徒が授業の中に自分を置いていくことが大切な部分である。こ



れから必要なのは蓄積された知識をどのように活用して、現実の生活に当てはめていくかということだ。

CLIL は単に英語に置きかえるのではなく、内容を通してどう学んだことを活かすかという大きな目的がある。英語を単に教えるだけでなく、何を考えさせるかという視点が欠かせない。入試も変わり 4 技能が必要とされて行くのは間違いなく、部分的にでも CLIL を授業に生かして、今後ますます日本で広がってほしいと願っている」とまとめた。

《実践発表 I》

特別委員を務める藤戸政綱氏(聖徳学園中学高等学校教諭)より、「ICT を活用した新たな英語教育とその実践事例」をテーマに、SELHi 指定をきっかけに、プレゼンテーションなど ICT を活用して必ず英語を話さなければいけない「必然」の環境づくり等、数々の試みに取り組む同校における英語教育の実践事例を紹介した。電子黒板や本年度から授業に本格導入された iPad 等 ICT 導入、WI-FI 環境の見直し等を進める中で、メリットとして生徒の授業への集中度アップ、授業が面白くなったこと、課題としては教員の教材作り直し等の手間、教員研修と情報共有化、技術トラブル対策で ICT 支援員配置等の必要性を挙げ、組織としての支援策は欠かせないと述べた。



《実践発表 II》

同じく特別委員の反田任氏(同志社中学高等学校教諭)より、「ICT を活用した授業デザイン」をテーマに、平成 22 年度からの ICT 導入から現在の 1 人 1 台 iPad 配布までの経緯、授業デザインにおける ICT 活用のポイント、生徒(楽しい、集中できる、音読練習が自分のペースでできる等)・教師(同一授業内で生徒の学習進度に合わせて各自に適した授業環境を提供できる、タブレットを使って生徒が学び合い、理解や運用力を高められる等)双方の授業アンケート結果を紹介した。また、教科センター方式、学習ポータルサイト、Skype を活用した授業例等が紹介され、特に英語の授業は元々 ICT と相性が良く、タブレット導入によって全体の底上げと同時に上位層も伸ばすことができるが、授業デザインの上でどのポイントで ICT を使うと効果的かを考えており、ICT が全ての教材にとって代わるわけではないと指摘した。



各発表のあとに行われた質疑応答では、多岐にわたる具体的な質問が多く出された。アクティブ・ラーニング実現のために ICT 導入は自然の流れとなっており、両氏の所属校における積極的かつ先進的な取り組みに対する現場の教員の関心の高さが見てとれた。



《閉会式》

山崎主任研究員が、特別部会開催に至る経緯と趣旨、【南日本エリア】をはじめとする今後の開催予定等を説明し、知識をどう活用するかが大事であり、特に英語科はそれを求められる傾向が強くなるはずなので、今日の研修を活かし、各学校で共有してほしいと総括した。

上智大学の協力により貴重な場所を提供していただき、本来なら 2 日に分けて行う内容を 1 日に凝縮した濃い内容の日程であったが、参加者は最後まで熱心に耳を傾け、参加者と語り合い、有意義な時間を共有できた充実感が伝わってくる研修会となった。



＜都道府県別参加者数＞

No	都道府県名	参加者数	No	都道府県名	参加者数	No	都道府県名	参加者数
1	北海道	0	17	石川	0	33	岡山	0
2	青森	4	18	福井	2	34	広島	4
3	岩手	0	19	山梨	2	35	山口	1
4	宮城	7	20	長野	2	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	1	37	香川	0
6	山形	2	22	静岡	5	38	愛媛	0
7	福島	2	23	愛知	8	39	高知	4
8	新潟	0	24	三重	4	40	福岡	4
9	茨城	4	25	滋賀	0	41	佐賀	0
10	栃木	5	26	京都	0	42	長崎	1
11	群馬	3	27	大阪	3	43	熊本	0
12	埼玉	5	28	兵庫	1	44	大分	0
13	千葉	8	29	奈良	0	45	宮崎	0
14	神奈川	20	30	和歌山	0	46	鹿児島	0
15	東京	36	31	鳥取	0	47	沖縄	0
16	富山	2	32	島根	4			
参加 27 都府県						計		144

アンケート集計＜コメントの集約＞

回答率 93.1%(134名/144名)

問 1. 当研修会への参加目的をお知らせ下さい。

- ・ CLIL の定義を知り、実際の授業に活用する方法を理解するため。
- ・ CLIL、ICT の活用の授業を知り今後の授業を見直すため。
- ・ 今後の日本の英語教育の変革について知りたいと思ったため。
- ・ 21 世紀型の英語教育の現状を学ぶため。
- ・ 指導力の向上、自己研修のため。
- ・ ICT と Can-do リストのことについて研究するため。
- ・ 最新の教授法を学び、授業改善に努めるため。
- ・ 学校から指示されたため。

問 2. 当研修会の各プログラム・内容等について、参考になった点、感想、意見等をお書き下さい。

講演【吉田研作氏】

- ・ 英語を道具として使う教育の必要性を感じた。
- ・ 英語教師はネイティブを目指すのではなく、国際基準の英語が使えれば良いという話を聞き気持ちが楽になった。
- ・ OECD(PISA)の好成績にも関わらず、外部試験の英語の成績が低レベルということに改めて英語教育の変革の必要性を感じた。
- ・ 現在の英語教育の課題が把握できたので、自分の授業での反省点も見つめ直すことができた。
- ・ 今後の課題が見えて、とても参考になった。
- ・ 現在と今後の英語教育について理解できた。
- ・ 4 技能教育の必要性が分かった。
- ・ 教師と生徒に求められる英語力の向上の在り方を知ることができた。
- ・ これからの大学入試の変革の方向をある程度理解できた。
- ・ 現在の日本の英語の状況を知ることができた。

体験授業【池田真氏】

- ・ CLIL の全体像をつかめた。
- ・ 英語での他教科の指導法について具体的に分かったが、専門用語等を勉強しないといけないと思った。
- ・ CLIL の具体例が分かり、実践したいと思った。
- ・ 英語が身に付いているという前提を作るのが難しいと感じた。
- ・ CLIL を初めて知った。
- ・ CLIL の授業デザインの考え方が理解できた。
- ・ 他教科を英語で教えるのは、日本語で説明を聞くより、内容が頭に入りやすい気がした。
- ・ CLIL を補充、補助的授業として導入を考えたい。
- ・ CLIL について知識が深まった。
- ・ 今後の英語教育で何が大切なのかを思い知らされた。

体験授業【逸見シャンタル氏】

- ・ 教科書を用いての CLIL の導入方法が分かった。
- ・ CLIL の実践によって、教科書の内容がこんなにも広がるものかと驚いた。
- ・ 教科書から生徒の意見へと、その導入が取り入れやすそうだと感じた。
- ・ CLIL の具体的な授業のアイデアが提示されていて興味深かった。
- ・ 実際の教科書の体験であったので、すぐに普段の授業に取り入れることができそうでありがたい。
- ・ 短い時間につめこみすぎだと思います。
- ・ 詩や映像の素材を使って英語を考えるトレーニングができることを知った。
- ・ 生徒に活動させ、発表させる良いヒントになった。
- ・ より高度な形での授業実践を見せてほしい。

実践発表【藤戸政綱氏】

- ・ iPad の導入について参考になった。
- ・ もう少しゆっくりうかがえる時間があれば良かった。
- ・ 自分の学校で実現は、かなり厳しいと感じた。
- ・ iPad を使った授業の具体的なイメージを持つことができた。

- ・ICT化にあたって、組織的な取り組みが必要不可欠だと感じた。
- ・ICT支援員の導入が成功するカギだとわかった。
- ・分かりやすい発表だったが、パワーポイントのより詳しいレジメがあると有難い。
- ・いろいろな活動があるのは良いが、それをどう系統立てて整理するのが課題だと思った。
- ・現状ではタブレット利用を積極的に推し進める肯定的な理由が充分ではないように感じられた。
- ・デジタル教科書のみの運用で、生徒が教科書を見なくなった。

実践発表【反田 任氏】

- ・ICTの具体的な導入事例を理解できた。
- ・ICTを利用すると英語教育の可能性が広がるのが分かった。
- ・高校での実践例も聴きたかった。
- ・ICTの活用はこれからの英語学習にとって必須であることはわかった。
- ・取り組んでみたい実践例がたくさんあった。
- ・多くの実践例を聞いて良かった。
- ・iPadの導入で授業が無限大に広がる可能性がわかった。
- ・ICTの整備が重要で、学校の経営力も重要だと思った。
- ・同志社の少人数教育と充実した環境に遅れを痛感した。

問3. 本年度秋以降の本研修会への要望等をお書き下さい。(例：研修会で取り上げてほしいテーマ、課題、実施してほしいプログラム、継続もしくは改善を望む事項、来年度以降の開催時期等)。併せて、当研究所の研修事業等に対するご意見がありましたらお書き下さい。

- ・発信型の英語教育の実践について。
- ・教師自身の英語力を磨くワークショップ。
- ・CLILの様々なアイデアの紹介。
- ・会話を含む大学入試の対策方法。
- ・大学入試の外部試験導入への対処方法。
- ・今回のような研修会を継続して行ってほしい。
- ・多読についての研修会。
- ・関西でも研修の機会を沢山設定してほしい。
- ・中高の現場の授業の展開や流れがわかるビデオなどを見せてほしい。
- ・新しい英語教育実践例を見せてほしい。

以上